

## ホメイニ師とアンディ・ウォホール：テヘラン現代美術館特別展

眼前のアンディ・ウォホールの「Suicide (Purple Jumping Man)」と題するアクリル画は、高層ビルからの投身自殺を、あたかも 40 年後の 9・11 同時多発テロを暗示するかのような荒涼とした風景として描き出し、マリリン・モンローをはじめとした著名人のポートレートで有名なこの画家の、時代を射抜く眼力を示している。

その隣には、1960年代の古き良きアメリカの物質主義の象徴とも言える、フライド・チキンのオープンをコミック調のタッチで描いたロイ・リキテンスタインの油絵が置かれている。次の部屋に移ると、ジャクソン・ポロックの、おそらく、現存する彼の作品の中でも、最も、躍動感にあふれる一つと思われる「Mural on Indian Red Ground」が置かれている。このアクション・ペインティングの代表作の前で、黒いチャドルを着た女性が一心不乱で絵に見入っている。

ここは、「世界近・現代芸術の表現 (マニフェステーション)」と題する特別展が開かれている美術館、といっても、ニューヨークの近代美術館 (MOMA) ではなく、反米の旗手として、また、最近では核問題で世情を賑わしているイランの首都テヘランの現代美術館 (MOCA) である。

1978年のイラン革命前、芸術家のよきパトロンであったパーレビ王朝最後の王妃ファラが自分の甥をキュレーターとして米国、欧州に派遣し、収集させた絵画の多くは、イラン革命後、長年にわたり、人の目に触れることなく、テヘラン現代美術館の倉庫に眠っていた。それらの一部が、32年ぶりに蔵出しされた、この特別展には多くのテヘラン市民が詰めかけている。

もちろん、「世界近・現代芸術」と題するからには、マネ、ゴッガン、ルオー、セザンヌ、ロートレック、ムンク、ピカソ、ブラック、ダリ、ミロ、カンディンスキー、エルンスト、マルグリットなどなど近代絵画を代表する有名画家の作品はほとんど全てと言ってよいほど揃っており、一通り見るだけで、近代絵画の歴史が一通り理解できる仕掛けとなっている。その中には、19世紀後半のジャポニズムの時代を象徴する、浮世絵を背景とした静物を描いたゴッガンの油絵もある。

しかしながら、何といても、この美術展の圧巻は、1950年代から70年代に世界の美術の中心となった米国、特にニューヨークを中心に活躍した芸術家たちのコレクションである。その、抽象表現主義、ポップアート、ミニマル・アート、コンセプチュアル・アートを代表する芸術家の作品は、以前、筆者がニューヨークにいた際に観たコレクション

に、量も質も全く引けを取るものではない。

そうした作品が、しばしば周辺の通りで「アメリカに死を！」と叫ぶデモの声が聞こえる、このテヘランの中心部にある美術館で堂々と陳列されている。これは一つの美術史上の事件と言ってもよいと思う。

イラン革命後の30年間、米国とイランの関係が激動の時期を経てきたように、イラン王妃のコレクションの中には、数奇な運命に見舞われたものもあった。その一つは、デ・クーニングの「女(ウーマン)III」である。このグロテスクとも言えるタッチのヌード画は、イラン革命の動乱前夜の1977年に初めてこの地で展示された際「こうしたふしだらな絵をこのまま飾ると爆弾を仕掛けるぞ！」との脅しの紙が貼られた後、革命前の熱狂、憎悪の対象となり得たことから、そのまま美術館の倉庫に仕舞われ、その後1994年に、静かな形で米国にあるイランのサッファール朝の細密画などと交換されたという。その後、この作品の所持者はハリウッドの大立者、ヘッジファンドの創始者と持ち主を変遷し、最後に売却された時の値は、絵画の売却額として史上第2位の1億3750万ドルであった。

絵画史上の最高売却額は、冒頭触れたジャクソン・ポロックの「ナンバー5」(1億4千万ドル)と言われているが、冒頭のここに展示されている同じ画家の「Mural on Indian Red Ground」にも、2003年に匿名のバイヤーから、1億5百万ドルでの購入オファーがあったとのことである。30年以上前、絵画の売却額として絵画史上歴代トップ10に入るような絵画2点を購入していた、この王妃のキュレーターの、美術コレクターとしてのみならず、投資家としての慧眼恐るべしである。

また、触れておかなければならないのは、反米の国是のこのイランにおいて、30年以上にわたりお蔵入りしていた作品を、ほとんど完璧な形で保存してきた学芸員をはじめとするテヘラン近代美術館関係者の志、質の高さであろう。聞くところでは、この30年の間には、あんな子供の書くような絵は処分してしまえといった、上からの圧力もあったようであるが。

展示作品の中には、ニューヨークのグッゲンハイム美術館で日本人としては、初めての個展を開催するなど、その人生の大半をニューヨークで活躍し本年五月に夭折された荒川修作氏の「図形絵画」の連作、原口典之氏のオブジェもあり、1960、70年代という米国美術の黄金期に、日本人芸術家が果たした役割にも思いを馳せることができる。

イランを取り巻く国際情勢に改善の兆しが見られない中、この展覧会が終了した後、このコレクションはまた当分の間お蔵入りしてしまうのだろうか。このテヘラン現代美術館の

所有する3千点にも上るコレクションが里帰りし、ニューヨークのMOMAで米国民の目に再び触れる日が来ることがあるのだろうか。

そんなことを思いながら、会場から晩夏の自然光がさしかかる、涼やかな円筒形の中央のホールに出ると、マン・レイ、サルバドール・ダリなど、20世紀を彩った知性の、セピア色のポートレートが壁一面に飾られ、観客に、今までのコレクションが過ぎさった日々のものであることを印象付ける仕掛けがあった。その上を見上げると、天井には、イラン革命の父のホメイニ師と、現在、最高指導者の立場にあるハメネイ師の肖像画が、厳しい表情で、20世紀の知性の面々を見下ろしていた。

(「近・現代世界芸術の展開」特別展は本年9月21日まで開催中)